

審査の結果の要旨

日本語連体修飾節とドイツ語関係節の対照研究（城本春佳）

主査 森 芳樹（言語情報科学専攻・教授）

副査 小野秀樹教授、藤井聖子教授（以上、言語情報科学専攻）、ボイクマン総子教授（グローバルコミュニケーション研究センター）、幸田薫本学元教授、近藤安月子本学名誉教授

本論文は、日本語とドイツ語のいわゆる「関係節」を対象に、一方の言語では関係節で表現可能なものが他方の言語では表現できない（または不可能ではなくとも非常に不自然になる）場合について、なぜ言語間でそのような差異が見られるのかを検討し、両言語における当該構文の、構文的・意味的・談話機能的特徴を明らかにすることを目的としている。

第一章では、日本語の連体修飾節とドイツ語の関係節について、類型論的な観点からその構文的な相違点を提示している。ドイツ語では関係詞が主名詞と修飾節述語との意味関係を明示するのに対し、日本語では主名詞と修飾節述語との意味関係を明示する文法的な要素はなく、主名詞が修飾節と直接結びつく形でさまざまな意味関係を表現し得る。そこで、日本語の連体修飾節を主名詞と主節の意味関係から五つに分類したうえで、関係節同士の直接対応だけでなく、ドイツ語の構文との対応を示すことで、問題の所在を明らかにし、本論の問題設定を行っている。

この作業によって研究対象を明確にしたうえで、第二章では、ドイツ語の関係節構文でも日本語の連体修飾節構文で表現することが難しいものを扱っている。この関連で殊に問題となるのは、意味的、統語的に主節に埋め込まれたものから独立文により近いものまで非統一的な振る舞いをする非制限的關係節である。個体集合を制限する機能の有無で制限的關係節と非制限的關係節を意味論的に明確に分離したのち、非制限節の中で従来の二分割の基盤になっている同格的關係節と継続的關係節の相違を、Cinque (2008) の「integrated タイプ」と「non-integrated タイプ」の対立を援用しながら、まず構文的特徴の観点から明らかにした。さまざまな現象を証拠として、同格的非制限節は文文法レベルで先行詞と結びつくのに対し、継続的非制限節は談話文法レベルで先行詞と結びつくことを主張している。そのうえで、多様な現象を的確に整理統合、説明し、結論として、ストーリーラインへの関与の仕方という談話機能の観点から、非制限的關係節が「同格的關係節」「継続的關係節」「挿入的關係節」の三つに分類できることを提案している。同格的關係節はストーリーラインに間接的に関与し、談話の理解を助ける従属的な情報を表すもので、統語的にもより主節に従属的な特徴を持つ。第二に、継続的關係節はストーリーラインに直接的に関与し、談話を更に先に進めるものである。統語的にも、より主節から独立した等位接続相当の特徴を持つ。ただし、関係詞による先行詞指示と、動詞が後置されているという従属節の形式を持つことで、独立文の連続よりも談話の結束性を示すことができる。最後に挿入的關係節は、ストーリーラインを逸脱した注釈やメタテキスト的コメントなどの情報単位を表現する。音韻、表記にも特徴があり、とりわけ対人的なモダリティ要素を含むことでストーリーラインを逸脱して聞き手に直接働きかける機能を持つ。これに対して日本語の非制限的關係節は、これら三つの談話機能のうち、同格的關係節に相当する談話機能しか持ち得ない。これがドイツ語関係節と日本語連体修飾節の構文的な相違を反映するものであることを、関係節の構文的位置、関係

詞（の指示機能）の存在、関係節内における対人的なモダリティの有無などの観点から論じている。

続く第三章では第二章とは逆に、日本語では非制限的關係節で表現できる意味内容が、ドイツ語關係節では同等の意味解釈を得ることが難しいケースを扱っている。ここで問題にするのは、「化粧をしている時の花子は（いつでも）女優のように見える。」という読みでの「化粧をしている花子は女優のようだ。」というような文における、「時空間制限読み」の非制限的關係節である。この時、關係節は主節の条件として機能し、主節が真となる時空間を制限している。しかし、これを直訳したドイツ語複文 „Hanako, *die schön geschminkt ist*, sieht wie eine Schauspielerin aus.“ は「花子は今（または習慣的に）化粧をしていて、女優のようである」という意味にしかない。この現象と言語間差異を、本論文では、場面レベル述語、個体レベル述語という理論言語学における語彙ベースの分類ではなく、事象叙述と属性叙述という文脈の作用を受けた文全体の解釈理解のレベルでの認知言語学的、日本語学的な分類に基づいて説明する。時空間制限読みを得るために、主節、關係節ともに事象叙述または可變的な非内在的属性叙述でなければならないことを記述的に明らかにしたうえで、非制限節が時空間制限の条件となるためには、絶対時制が關係節にまで貫徹していないことが必要不可欠の条件であることを見出した。そのうえで關係節と主節が主節時制で結びついたうえで、文脈の条件が整った場合に反復的な時空間制限読みが得られると結論づけている。同じ原則によって、対応するドイツ語非制限節で時空間制限読みは得られず、一方、制限的關係節および分詞、形容詞の付加語修飾を用いれば問題の読みが得られることも説明可能となった。ドイツ語非制限節が「特定時間読み」は容認しても時間制限読みは容認しないという事実、第二章で詳述した、關係詞が指示的であるという非制限節の特性も関与していることも示すことができた。ドイツ語の非制限的關係節は常にそれ自体が独立した時制を持って時空間項を取るのに対し、日本語の非制限的連体修飾節は（絶対時制の場合にはドイツ語の非制限的關係節同様それ自体が時空間項を同定することもできるが）独自の時制を持たず、主節の命題と結びついたうえで時制を取るという、より主節に従属した特徴を持つことが明らかとなった。

第四章では、**wie**（英語の **how** に相当）を文頭に持つのに従属節内の人称代名詞が主節主名詞と呼応することで關係節として働く、ドイツ語のいわゆる「**wie** 關係節」について論じている。最初に、**wie** 關係節にも制限用法と非制限用法があること、そのうち制限的 **wie** 關係節は日本語のヨウナ節と同等の意味機能を持つことを確認する。そのうえで、制限的 **wie** 關係節とヨウナ節はともに、認知言語学の参照点システムを援用することで説明できることを示した。つまり、修飾節が表す集合 **X** を参照点とし、それに「類似するもの」を含む支配領域が設定されて、主名詞の指示するターゲットが検索されるという意味解釈プロセスを経る。これに対して非制限的 **wie** 關係節には、「付帯状況」と「背景的な情報付加」の二つの機能・用法があることを初めて示した。「付帯状況」は時間副詞節を導く **wie** の機能と連続的に捉えられるものだが、主節に後置され、後続の文脈と直接つながるという点で継続的關係節と類似する特徴を持つ。一方、「背景的な情報付加」は意味的に主節の内容と密接に関わらず、挿入的關係節に類似する特徴を持つ。先行研究が寡少であるなか、第二章で示した非制限的關係節の三分割が非制限的 **wie** 關係節にも波及していることを的確に示している。

第五章はまとめである。

以上の議論により、日独両言語のいわゆる「内の関係」の制限的關係節については名詞接近性の階層に関する相違点はあるものの比較的安定した対応があるが、先行研究がいまだに手薄である非制限的關係節については、ドイツ語ではより独立文に近い、主節に埋め込まれていない特徴を持つのに対し、同格的、継続的、挿入的非制限節の三分割のシステムの中で同格節しか持たない日本語では、独自の時制を持たない、より主節に埋め込まれた特徴を持ち得ることが明らかとなった。

最終審査は、本年9月16日11時よりオンラインで開催された。審査では、細部に至るまで議論を丁寧に扱って緻密な議論を展開しており、全体の主張は長い伝統に従いつつも、各々の章の議論において新規性を示しているだけでなく、非制限節の三分割を中心にした全体の議論の軸と展開もきわめて明快であるとの高い評価を得た。日本語教育でこの分野での将来の活躍を願う声が審査委員から出たほど、今後の発展性も含めて、優れた論考に仕上がっていると言ってよい。とくに第三章の時空間制限読みの非制限的關係節に関する論述は、全員一致できわめて高い評価を得た。

審査委員からは、事例をさらに積み重ねてほしい箇所もある、語用論的連体修飾節も含め機能的対応を全面的に扱うべきであった、とくに（これは機能的には対応しないが構造的意味の側面で親近性が見られる）日本語の主要部内在型關係節とドイツ語の継続的關係節の対応を探るべきであったなどの意見も出された。また、対照研究において構文的対応がない場合、機能的補完はどのように定義され探索されるべきかというすぐれて方法論的、言語哲学的な問題提起もあった。しかしこれらはいずれも、今後の研究の展開に期待する要望ということであり、総じて、提出資格審査における各審査委員のコメントも十分取り入れた、完成度の高い論文として評価された。

以上の理由により、城本春佳の「日本語連体修飾節とドイツ語關係節の対照研究」を、本論文審査委員会は、博士論文としての内容を十分に有しており博士（学術）の授与に相応しいと判定した（令和2（2020）年10月8日専攻会議承認）。